

C型肝炎に対するインターフェロン療法地域連携パス

(熊本県肝炎治療特別促進事業用)

I. 治療薬について

1. 指定医療機関において、HCV グルーピング、HCV RNA 量、過去の IFN 治療歴、治療の結果等に応じて、原則として別紙の通り IFN 治療方法を決定します。
2. 治療期間中は、定められた通りに貧血の程度や血小板、白血球および好中球数に応じてインターフェロンやリバビリンを減量あるいは休薬する必要があります。

II. 治療期間ならびに治療期間中について

治療期間は、上記 I - 1 にて示した通りです。

1. ただし、治療期間を延長する場合があります。
 - 1) 1型高ウイルス量の場合、ウイルスの陰性化時期に応じて、最大 72 週間まで延長する場合があります。
 - 2) そのため、開始後 4 週ごとの HCV RNA 量の把握が重要で、その推移に応じてその後の治療計画を見直す事があります。
2. 治療導入の 2 週間は基本的に入院とします。この期間に初期の副作用がでることが多く、2 週間前後に薬剤の減量を行うことが多いです。
3. 通院での維持療法に移行した後は、原則指定医療機関で 4 週間ごとに治療効果と副作用をチェックします。その間の治療継続と定期検査をお願いします。特にペガシス治療の場合には毎回投与直前に血球検査を行うことが必須とされています。
4. 治療期間中は、特に進行した例では、肝がんの早期発見の目的で定期的に腹部超音波検査が必要です。基本的には 6 ヶ月、進行した例では 3 ヶ月毎行なう必要があります。腫瘍マーカーとしては AFP または PIVKA II を測定します。
5. 治療開始時に眼底検査を行い、その後は眼科医の指示に従って定期検査を行います。
6. 治療期間中ウイルス陰性化が規定期間内に認められない場合は、延長投与無く終了となります。
7. 治療期間中は別紙に定められた検査は最低必ず行なってください。また必要に応じて随時検査を追加して下さい。

III. 副作用について

1. 副作用には治療期間に応じて、初期、中期、後期副作用があります。
 - 1) 初期副作用：1 週間前後で出現します。インフルエンザ様症状や発疹、食欲不振などがあります。

- 2) 中期副作用：12 週間頃までに出現します。倦怠感、不眠、不安や躁鬱状態などがあります。貧血が進行します。間質性肺炎（乾性咳嗽、呼吸困難）が出現することもあります。
- 3) 後期副作用：脱毛が出現します。甲状腺機能異常が増悪することがあります。
- 4) いずれも薬物治療でコントロールしますが、減量や休薬が必要となる場合があります。

IV. 治療終了後について

1. 治療終了後は、1 ヶ月毎に外来でウイルス検査と肝機能および血液検査を、これまで通り定期的な腹部超音波検査を行います。副作用があればそのフォローアップも行います。
2. 治療終了後 6 ヶ月（24 週間）まで HCV RNA が持続陰性化していれば、（SVR、ウイルス駆除）と判定します。
3. SVR であっても、その後に肝がんを発症する場合がありますので、引き続き定期フォローアップが必要です。
4. 治療後も HCV RNA が陽性の場合でも、肝機能（ALT）が落ち着く場合がありますが、引き続き定期フォローアップは必要です。

V. 地域連携パスの運用

退院後の定期的な通院期間中の情報の共有をはかり、治療に関する問題を軽減し、患者様に質の高い治療を均一に行なえる様にするため作成しました。

指定医療機関退院時に入院中の情報を記入したものを印刷して患者様にお渡しします。貴医療機関における情報を記入していただき、次回の指定医療機関来院時に患者様に持参していただければ、新たに最新の情報を追記した後に印刷いたします。それを再び患者様にお渡し、貴医療機関における情報を記入していただく。これを繰り返すこととなります。何か問題や疑問が生じた場合にはすぐに指定医療機関に連絡いただければ対処いたします。

長期間の治療になりますので、できるだけ問題なく治療を完遂し、より良い結果が得られるよう、ご協力をお願いいたします。